
ある日突然、地下迷宮

ウィリアム・輝夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日突然、地下迷宮

【Nコード】

N0527W

【作者名】

ウィリアム・輝夫

【あらすじ】

ある日、目が覚めると、俺はうす暗い洞窟の中にいた。もちろん、寝る前に洞窟に散歩しに行ったとかそういうことはない。恐らく、家の中で寝ていたに違いないのだ。それなのにどうしてこんなところにいるのだろうか。しかも、見たこともない青いジャージを着ている。俺はどうしたのだろう。誰か、助けてくれ…。

というような小説を書こうと思います。

かなりな部分、PSPのゲーム、「ゴッドイーター」をパク…い

や、リスペクトしております…。

「ある日突然、地下迷宮」

「日本海側 暴風や大雪など警戒」

という文章が俺の頭の中をよぎった。寝る前に新聞でも読んだのだろうか。よくわからないが、やけに粘り強くその文章が頭の中を反響している。そして、目が覚める。

ここはどこだろう。薄暗くて、じめじめしているが、温度は丁度よかった。洞窟みたいである。俺は、鍾乳洞の下で寝ていた。布団や毛布などはない。辺りは、真っ暗ということはなくぼんやりと光っている。

しかし、俺はこんなところに来た覚えはない。いや、そもそもが俺は誰だろうか。自分の記憶がさっぱり抜け落ちていた。

自分が若者の男性で日本人であることは知っていたが、あとは真っ白になってしまっている。そして、ふと手を見ると、右手が真っ黒になっていた。まるで、爬虫類の手みたいになっている。爪も黒く鋭く伸びていた。

「おっす。

よくきたな」

と急に俺に声をかけてきた男がいた。

黒ぶち眼鏡をかけて、黄色いジャージを着ている俺と同じ歳、多分、二十代中ごろくらいで、声がやけに低い男だった。

「俺、キー坊っていうんだ。

好物はカレーな。

よろしく」

というと、握手をしてきたが、キー坊の手も爬虫類のような手をしていた。

「黒い右手」

「ひよつとして、お前も記憶喪失かい。俺は、昨日『家政婦のミタ』ってドラマを見て、寝て、それから、ここにいるんだよ。で、五分くらい歩いていたら、お前に会ったのさ」

キー坊は、自分の黒い手を見つめながら呟いた。

「お前の手も一緒だよな。俺は黄色いジャージ、そしてお前は青いジャージを着ている。これはどういうことなんだろうか」
「うーん。」

わからない。

何かのどつきり企画とかだろうか。
にしても、二人とも記憶喪失つてのがなあ。

俺もそうなんだよ」

「俺もドラマのこと以外はまったく真っ白なもやがかかったように、わからなくなっているんだ」

「気味が悪いな」

「そうだな。」

俺は自分の名前はキー坊つてのは覚えているんだ。

お前は、名前は覚えていないのかい」

「タロー。」

今、俺の頭にそんな言葉がよぎったな。まあ、それじゃあ、タローにしておこうか」

「よし、これでお互いに名前を呼べるな。」

ああ、よかった」

といっておいて、キー坊は少し笑う。

「まあ、何もよくはないんだがな、実際、それにしても、この手、何だろつかね」
「うーん」

と二人が話している間に、洞窟の隅のほうにあるトンネルから腐った魚のような匂いが漂ってきた。二人が顔をしかめていると、全長60センチくらいの巨大なオタマジャクシのような怪物が、羽根をはばたかせて、こちらに迫ってきた。

「あいつは、俺達のファンじゃないよな」

とキー坊はいった。

「怪物だよ。
逃げろ」

俺は後ろを向いて走った。

「追い詰められて…」

二人が逃げたトンネルの先は10mくらいで行き止まりになっていた。後ろから、空飛ぶ巨大なオタマジャクシがやってくる。

「まあさ。

須藤茉麻。

マイ恋人にしたい芸能人ナンバーワン。

俺は死ぬ前に、お前とデートしたかったあああ」

とキー坊は泣き叫んだ。

「もうこうなったらやるしかないな」

というと俺は拳を固める。

「うりゃああああ」

と俺はダッシュして、パンチを決めようとするが、オタマジャクシは急に後退して、空を殴る俺の体勢がおかしくなったところを再び、突進してきた。

俺はあっけなく吹っ飛ばされる。

そして、壁に頭をぶつける。

「痛い。

何だ、こいつ。

やっぱり、強い」

という暇もなく、オタマジャクシは、巨大な二つ目のすぐ下にあ

る牙を光らせて、俺の首筋を食い破ろうと近づいてきたが、

「バキッ」

そこをキー坊が蹴り上げた。

「どおおりゃあああああ」

オタマジャクシは、弾き飛ばされるが、すぐに空中に浮かんで、咆哮をする。牙が恐ろしい。

「死ぬ。」

俺は死ぬ。

何で俺はこんなところで死ななきゃいけないんだ」

頭から血を流しつつ俺はキー坊に訴えた。

「今、あいつを蹴ったんだが、ものすごく重かったよ。足がしびれるんだ。

これは俺達じゃ適わない。

多分、これ死ぬな……」

キー坊は涙を流しながらヘラヘラ笑った。

「鬼の手、発動」

巨大オタマジャクシの怪物を前にして、俺達はどうとう命を奪われるのかと、覚悟をしていたら、不意に、俺の右手が輝いた。

俺の頭の中に、ハンマーと機関銃と巨大な盾のイメージが浮かんできたのだ。しかも、そのどれかを選ぶ必要があるらしい。俺はとっさにハンマーを選ぶと、急に

「シュツワツ」

と音がして閃光がきらめくと、右手に1mくらいはあるハンマーが握られていた。しかも、やけに軽い。まるで、新聞紙を丸めて握っているようなものだった。

「おうわっ。

何だこれ」

ふとキー坊の方を見ると、1mはある大砲を肩から提げている。

「武器だよな。

この手が光って、武器が…」

とキー坊がいつている間にオタマジャクシが襲ってきた。
俺は、ハンマーで

「ガシッ」

とぶんなぐる。

するとオタマジャクシは、血を噴出させて下がった。

「うおおおお

大砲発射あああああ」

キー坊は、砲撃をした。爆音を立て、キー坊は後ろに吹っ飛ばされそうになるが、踏みとどまる。

黒煙が辺りを多い、煙が晴れると、オタマジャクシに直撃したみたいで、真っ黒になった死体が転がっていた。

二人の手に使っていた武器はさっと消える。

「あれ？

勝っちゃったよ」

キー坊は座り込んだ。

「そうだね。

多分、この手が俺達を助けてくれたんだろうけどね」

「ああ。

何でこんな目に遭うんだろうか。

振り返れば俺の人生、こんなことばかりだったような気がするな。

ま、記憶喪失で覚えていないけど」

「とにかく、この洞窟から出ないとなあ」

「はあ、面倒なことになったもんだ」

今後もこのような怪物が出てくるかもしれないが、俺達は、このままここにいてもしょうがないので、洞窟の中を進むことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0527w/>

ある日突然、地下迷宮

2011年12月24日08時45分発行